あろう。そののちの記録に、一九二六年一一月執筆依頼の永井委員の優生学の話は未完だとある。

永井の民族衛生の主張の基本は、民族資質の向上であり、バースコントロールのコントロールをもとめ、メンデル、ゴールトンをひき、畑よりまず種と主張する。一九三六年の読売新聞には、「民族の花園を荒す雑草は断種手術によって根こそぎ刈取り日本民族永遠の繁栄を期さねばならぬ」などとのかれの談話がのっている。かれの論文は、メンデルの仕事のこまかな紹介におおくの部分をさき、また明治天皇御製を引用し、全体に植物育種学的色彩がつよい。人間の病気についてかれがのべることはすくなく、その内容もかなりずさんである。この点は、かれが生理学者であったことをかんがえても、人間の病気についてかれはよわすぎたようにみえる。そして、かれの論文は迫力をかいている。

雄山閣の優生学の講座の『民族衛生学概論』も下巻をだしておらず、前記の未完論文ともあわせて、多筆の人であった永井としては意外なことである。

日本の断種法案には、対象を遺伝病に限定しないものと、遺伝病に限定したものとがあった。日本民族衛生学会は遺伝病に限定した断種を推進する立場をとり、一九三六年には民族衛生学会の考え方にもとづく政府案が準備されるところまできた。永井は日本民族衛生学会理事長としてこの過程におおきく関与していたが、『民族衛生』誌上にはこの具体的過程はあらわれていない。こののち永井は台北、北京にうつったので、国民優生法制定の具体的過程には関与していないのだろう。

こうして、永井は断種法制定運動の頂点にたつ人ではあったが、その遺伝学理解はメンデルをおおきくでてはいなかったようで、理論的指導者というよりはロマンティックなイデオローグであったとみえる。戦後の著作でもかれの基本的考え方はかわっていない。なお、かれは性の問題をはやくからとりあげており、戦後は主としてひろい性問題にとりくんでいった。

（平成十二年一月例会）

医学館の学問の形成について

町　泉寿郎

江戸医学館の学問を特徴づけるものは、いわゆる「考証学」と呼ばれる文献の正確な把握を重視する学風である。よって、医学館の学問についての考察は、江戸時代における考証学の系譜という文脈の中でとらえることができる。この学的系譜を考察する上で、当面の著者の問題意識は次の三点にある。

- 清朝考証学の摂取の問題
- 寛政異学の禁が与えた影響
- 古学派・古方派および蘭学との関係

本誌に収載された拙稿三報「医学館の学問形成（一）（二）

（三）は、寛政異学の禁の影響を中心に考察したものである。問題点を整理するために報告の要旨を要約する。

○第一報「医学館成立前後」

一章から四章までは医学館成立の背景と意義を、五章では学問形成の具体的経過を述べた。

一章〈学校官立化をめぐって〉

江戸幕府が初期の譜代大名連合政権から元禄期の専制君主政治を経て、享保期以降、法治的政治体制・官僚機構確立を模索するなか、官吏養成機関としての官立学校開設が必要となったことの例証。

二章〈躋寿館創設前後の時代背景〉

江戸時代の文化の上方から江戸への比重転換期がほぼ一八世紀中葉。経済力を背景とした町人の学問芸術への進出の新潮流と、そうした民間活力を政治に導入した田沼意次の政治手法。以上二点と躋寿館との関連。

三章〈躋寿館官立化の意義〉

両典薬頭家の凋落と多紀氏への権力の移行（官医番入等に関する推挙権の移動）。官立学校制度創設による官医の組織化。

四章〈昌平黌と医学館〉

学問の進歩は専門化、分化を必然的に伴なう。異学の禁による闇斎学系朱子学の正学化は、この学問分化傾向に敢えて逆行する政策。この結果、昌平黌の学風は萎縮化・硬直化し、医学館の学風は病変への対応という名目のもと異学の禁令を回避して博大化・精密化した。

五章〈医学館の学統の形成〉

①濫觴期――躋寿館時代

講師・聴講者は町医中心。講書内容は本草・素問・霊枢・難経・傷寒論・金匱要略の六部書が必修とされ、当初は金元医書も併講。儒書が井上金嶽門人により併講。

②官立化から文化年間まで

官医以外（加藤俊丈、片倉鶴陵、大田錦城、亀田鵬斎、吉田篁墩等）の排除。西国からの登用（福井楓亭、池田瑞仙、荻野元凱、小野蘭山）。若手官医の素読指南任用。かくて官立学校としての機構整備がなされる一方、優秀な人材の排除を惹起した。

③多紀桂山の死後、天保の改革以前。

資料の不足に起因するのかもしれないが、この時期は医学館の停滞期の感がある。考証学の研究は、伊沢蘭軒・狩谷棭斎らの家塾等に場を移し、この中から次代を担う人材が育った。

④天保十四年以降。

制度改革により天保十四年以降、医学館に陪臣医・町医の出席が可能となった。この結果、旧伊沢蘭軒・狩谷棭斎門人が医学館に吸収され、考証医学の成果をあげた。

○第二報「寛政の改革期の官医たちの動向――『よしの冊子』の記事から――」

『よしの冊子』という従来の医学史研究に使用されなかった史料によって、寛政の改革期の官医の動向を詳細にたどった。

寛政元年二月の、多紀藍渓が躋寿館以外に医官のための医学校の建設を希望している記事は、躋寿館の官医出席者の少なさを暗示する一資料。寛政三年二月の、今大路、竹田、吉田、半井の四家が独自に医学校開設を計画したが、半井氏が独力開設を主張したため計画が頓挫したという記事は、更なる検証を要するが従来未知の貴重な資料。寛政元年六月の躋寿館における賭博発覚の記事からは、大田錦城、吉田篁墩といった考証学、校勘学の先駆者の人となりの一端が窺えるのみならず、彼等を講師として許容した多紀氏の学問上の嗜好が知られる。

○第三報「幕末考証学の位相」

幕末に考証学が成立する背景は次の二点。物理的条件としては、小学（文字・音韻）に高い達成を示した清朝考証学（十八世紀中葉から一九世紀前半に極盛）の書物、および校勘資料（古文献、日本にのみ伝存したものが多い）が入手できる社会的・経済的・地理的環境。二つには思想史的背景として、寛政異学の禁を契機に治者と被治者の学問上の乖離が促進され、朱子学は武士一般や儒者、考証学は「道」に与らぬ階層中の富裕者によって分担されたこと。以上のことから、考証学は幕末期、清朝考証学の影響下に、日本独自の資料を駆使して、江戸在住の富商や医者などが主な担い手となって花開いたのである。

（平成十二年三月例会）

＊＊＊紹　介＊＊＊

二宮　陸雄　著

『桑田立斎先生』

一〇万人の人々に牛痘接種をおこなおうとの悲願を自らに課して、遠く蝦夷地にわたってアイヌに牛痘をほどこした桑田立斎の事績はひろく知られている。しかしその生涯については参照すべき伝記を欠いているので、それを知ることは容易ではなかった。

エドワード・ジェンナーの牛痘接種法発明から二百年の記念すべき一九九八年に本書が上梓されたのは、おおいに意義のあることであった。立斎自筆の『立斎年表』を基にして、その生涯、とくに安政四年に蝦夷地においておこなった牛痘接種の苦闘を克明に描いている。

桑田立斎の伝記は立斎一族の後裔にあたる日本史家桑田忠親氏が、一九八二年に『或る蘭方医の生涯』（中央公論社）として出版している。この折にも桑田氏が基本的に準拠したのは『桑田立斎年表』であるが、折角歴史家が執筆し一級資料を参考にしながらも、出版の目的が「専門の医学者の研究に寄与するような大それたものではもちろんなく、一般の歴史や文学の愛好者に立斎の人物を広く知って頂くため」との観点であったので、各所にフィクションを織り交ぜて史伝と読物も加味したものになってしまった。それだけに通読しやすいと